

明治天皇の声がきこえる⁹



歴史大絵巻としての『明治天皇紀』

坐摩神社、および田中河内介のこと

小河一敏と大久保利通／乃木希典と天皇との対話

記憶の王か【上】⁴³



お鯉の名を知っていた天皇／情報源は新聞

石黒忠應の日清戦争報告

「あの十年役の山縣か」と天皇は言つた



記憶の王か【下】⁶⁰

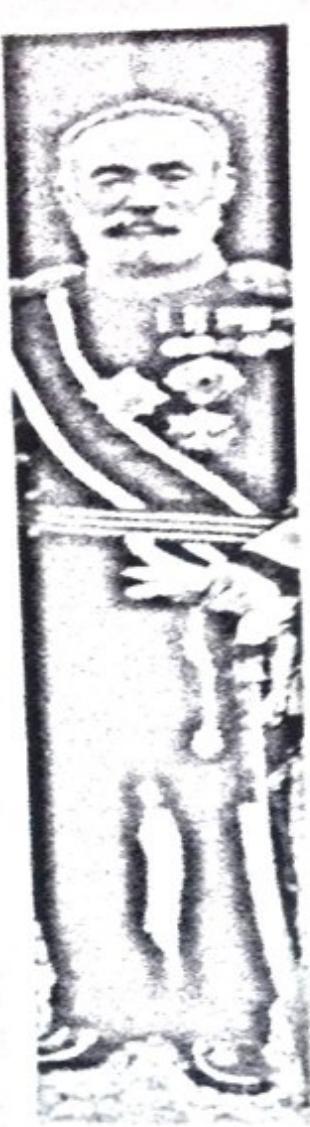


「あの時に西郷はかういった」

『習志野行軍』における西郷と天皇

『お鯉物語』が明かす真実

天皇と乃木希典の関係²⁶



旅順攻略と乃木希典／天皇は「乃木は死ぬぞ」といつたか

山縣はいつた、「乃木はやはり死んだであらう」と

我國未嘗有、變革ノ先駆者也

統治の王【上】

76

横井小楠の暗殺／「五箇条の御誓文」の草案／

横井小楠・坂本龍馬・三岡八郎から、そして木戸孝允へ／

皇子の薨去は皇室の私事



統治の王【中】

93

普仏戦争の衝撃／

国家主権の行使としての戦争／

宮政改革の断行／「侍講」元田永孚



統治の王【下】

110

天皇は変わりはじめた／みずから智力を恃む「英毅剛強」／
西郷と大久保＝ゲバラとカストロ／藤波言忠の諫言／
「君臣水魚の交り」と諫言／

天皇は変わりはじめた／みずから智力を恃む「英毅剛強」／

明治國家のゆくえ その一 大久保利通の「征台」

158



明治國家のゆくえ その二 西郷隆盛の「征韓」？

大久保利通の死／大久保の「三十年」計画と内治主義／
西郷の征韓論(?)／大久保の征韓論批判



侍補制度と大久保の遭難

126

聖徳を補導する侍補／

天皇は歴史上の人物月旦を好んだ／

大久保利通の「宮内卿」案／侍補の廃止



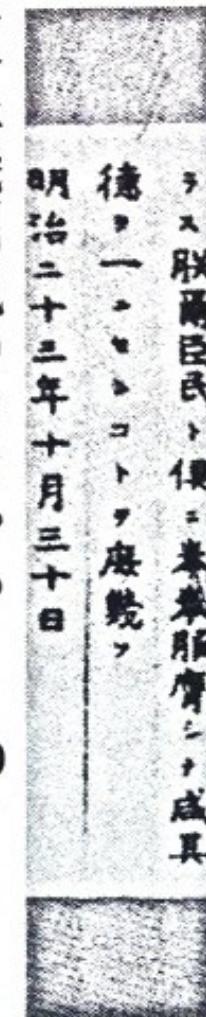
明治国家のゆくえ その三 174 権力は伊藤博文へ

「全権」を欲した大久保利通／台灣出兵問題と國際公法／
大久保から伊藤博文へ／井上毅の登場



天皇機関説のたたかい その三 224 井上毅の登場

『天日本帝国憲法』第十九条／『天日本帝国憲法』の起草／
『天日本帝国憲法』の設計者、井上毅／枢密院における伊藤と井上



天皇機関説のたたかい その一 190 「国民」の教育

教育における「忠孝」／伊藤博文の「教育議」／
伊藤と元田の対立／儒教的君主論と、立憲君主的な機関説



天皇機関説のたたかい その一 240 北一輝と斎藤隆夫

「万世一系」という仮構／国体論／革命論の北一輝／
井上毅の「治ス」と伊藤博文の「統治ス」／

斎藤隆夫の日中戦争批判の中で／憲法の矛盾もしくは欠陥



天皇機関説のたたかい その二 207 ドイツ的な立憲君主制

伊藤博文の「急進的西洋主義」／「万世一系ノ天皇万機ヲ總攬」す／
天皇は國家運営の機関／立憲君主制下の天皇

天皇機関説のたたかい その二 256 福沢諭吉と井上毅

福沢諭吉の国体論／「皇統連綿」の血統主義批判／「西洋の文明は
我國体を固く」す／福沢諭吉vs.井上毅／「万年の春」のごとくあれ





『大日本帝国憲法』と天皇その三 「不磨の大典」をめぐつて

天皇の激怒／（明治の精神）／

「不磨ノ大典」？／憲法發布式とベルツ博士

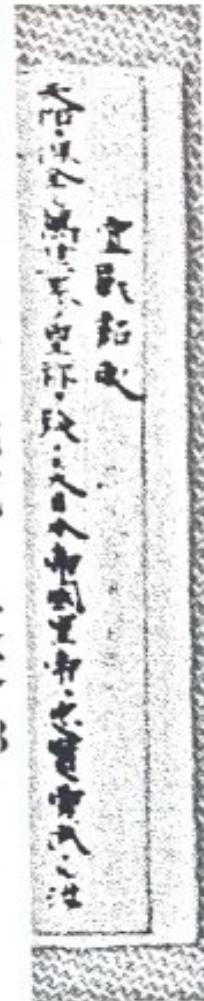
人間的な好き嫌い【下】

320

「忠臣蔵」が好き？／山岡鉄舟と乃木希典／

軍服を脱がず／大隈重信という「才芸」の人／

尾崎行雄の「共和演説」



国家システムへの抵抗と受容

288

日清戦争と外相の陸奥宗光／

対清強硬派の松方正義／

「朕の戦争にはあらず」と／「文明」の戦争

南朝正統の裁断

337

「忠臣」楠公が好き／

後醍醐天皇の倒幕計画／南北朝対立時代の終焉／

南朝正統を上奏／南朝正統の「聖裁」



人間的な好き嫌い【上】

304



日清戦勝に「喜色」／

斎藤実という忠臣／伊藤博文に対する信頼／

陸奥宗光が嫌い

日露戦争と天皇【上】

353



「最も偉大な君主」？／

天皇の心配／戦時の「国民」と「田園」／

日露戦争中の天皇の歌



日露戦争と天皇【下】

369

「文明」の戦争／

美子皇后の心配／坂本龍馬の神靈／

山縣有朋の国際法意識



大逆事件——統治の終わり

402

日比谷焼打ち事件／北一輝「自殺と暗殺」／

明治末年の天皇爆殺計画／

天皇の動揺と特赦



神格化のなかで

385

写真嫌い／神格化の裏側で／

東京大学総理・加藤弘之の転向／天皇の身体的衰え／

天皇「わしながら死んでもかまはぬ」



その大いなる幻影

419

明治天皇の死／「明治人」徳富蘆花／

夏目漱石「明治の精神」／「明治の子」の革命的カリスマ／

終わりに——明治天皇の大いなる幻影を超えて

あとがき

436

毎日新聞社刊『本の時間』二〇〇八年五月号より
二〇一〇年六月号に連載（二十六回）